

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）
（主任研究者 加藤則子）

分担研究報告書

児童虐待事例の家族再統合等にあたっての親支援プログラムの

開発と運用に関する研究

児童福祉施設職員に対する子育て支援プログラムの実施と効果に関する研究

分担研究者 柳川 敏彦 和歌山県立医科大学 保健看護学部

研究要旨

児童に虐待をした保護者に対する親子の再統合の促進等は、国や地方公共団体の責務として位置付けられ、指導勧告に従わない場合の措置についての規定や、措置解除する際に保護者指導の効果等を勘案することなど、保護者への指導・支援の強化がなされている。このような背景から児童相談所職員や児童福祉施設職員においても、親支援プログラムについての理解が必要であり、さらに親支援プログラムの施設での活用も望まれている。

児童福祉施設に勤務する児童指導員、保育士、心理士など 34 名に対してグループ・トリプル P を行い、トリプル P の効果判定を行った。トリプル P は、認知行動療法の理念に基づいた子育てへの教育的介入手段として開発されたプログラムである。内容は子育てスキルの実施状況の確認や改善策を話し合い、子どもの問題行動の解決に自主的な解決方法を学ぶ手立てを提供するように工夫されたものである。

プログラムは通常 8 週間（1 週 1 セッション）で行うものであるが、本研究では 1 週毎の 3 週間でプログラムを終了するものとした。職員の担当する子どもの長所・短所（SDQ）、職員の子育てスタイル（PS）、心理状態（DASS）、子育ての自信（PSBC）、虐待行為（JM17）・認識（CA38）・ポテンシャル（JCAP77）を用いプログラムの前後比較とともに、プログラム終了後に満足度等を測定した。

プログラム開始から効果判定までが 1 か月から 2 か月と短期であったため、子どもの行動変化には至らなかったが、職員の子育てスタイル（PS 多弁：長い叱責）と子育ての自信（PSBC）で有意な改善が得られた。また、虐待ポテンシャルが有意に低下した。プログラムの満足度調査においても良好な結果が得られ、保護者の子育てスキルで使用頻度の高いものが判明した。

今後、今回の効果の継続性とともに、子どもの行動の改善効果について長期の経過観察が望まれる。

A.はじめに

平成 23 年度と 24 年度の全国児童相談所における児童虐待相談の対応件数はそれぞれ 59,919 件、66,701 件と一貫して増加し続けている。平成 23 年度の児童虐待相談対応の内訳は、59,919 件中、一時保護は 13,251 件 (22.1%)、施設入所等は 4,499 件 (7.5%) であった。施設等の内訳は児童養護施設 2,697 人 (59.9%)、乳児院 713 人 (15.8%)、里親委託 439 人 (9.8%)、その他施設 650 人である。厚生労働省はこのような現状を踏まえ、子ども保護・支援、保護者支援の課題を抽出した上で、児童虐待対策の今後の方向性としての必要な施策を提示している。

一時保護所の拡充・混合処遇の改善

社会的養護体制の質・量の拡充

親子再統合に向けた保護者への支援

親権にかかる制度の適切な運用

である。社会養護体制においては、「家庭的な養育環境、施設における小規模化の推進」が具体的に掲げられている。

平成 24 年度、25 年度の 2 年間での厚生労働科学研究補助金による研究「児童虐待事例の家族再統合等にあたっての親支援プログラムの開発と運用に関する研究」において、24 年度は児童相談所における虐待対応としての相談事例である被虐待児の保護者を対象に、保護者の主体性を尊重し、保護者のニーズに応じて子育て支援プログラム (トリプル P) を 14 名の保護者に提供し、その効果を測定した。結果、子どもの問題行動の改善、親の心理状態、子育てスタイル、子育ての自信の改善とともに、子育て支援プログラムへの満足度においても良好な結果が得られた。

児童虐待を行った保護者に対する指導・支援は、子どもの最善の利益を保障するために実施するものである。児童虐待の防止等に関する法律では、親子の再統合への配慮のもと、児童福祉司等による指導を保護者が受けるよう義務付けられ (11 条)、施設入所措置を解除する際には児童福祉司等の意見を聴き、指導や勧告に従わないと措置解除しないとされている (13 条)。このような背景から児童相談所職員や児童福祉施設職員においても、親支援プログラムについての理解が必要であり、さらに親支援プログラムの施設での活用も望まれている。

B.目的

被虐待児童に対応する児童福祉施設職員に対し、子育て支援プログラムの 1 つである「トリプル P (前向き子育てプログラム)」を実施し、プログラム効果を測定することを目的とした。

C.対象と方法

1. トリプル P の概要

オーストラリア・クイーンズランド大学のマット・サンダースらにより開発されたトリプル P は、ポジティブ・ペアレンティング・プログラムの頭文字から命名され、前向き子育てプログラムと呼ばれている。トリプル P は、認知行動療法の理念に基づいた親の子育てへの教育的介入手段として開発されたプログラムである。安全で楽しい環境作り、積極的に学べる環境作り、一貫したしつけ、子どもに対して現実的な期待をもつこと、親としての自分を大切にすること、の 5 つの基本理念に基づき、良い親子関

係を促進すること、子どもが新しいことを学んだり、良い習慣を促すことを目的とする。親は子育てのほとんどの局面に前向きに取り組み、応用性の高い理念を身につけることが出来るように配慮されている。トリプルPの実践は関与する対象、内容に応じて5つのレベルが設定されている。すなわち、レベル1：子育てについて、社会全体に広く情報伝達できるメディアによる広報活動、レベル2：子どもの発達の日安や特定の行動について、地域の子どもに関する施設で簡単な説明や資料の配布などの研修会開催、レベル3：軽度から中等度の子どもの問題行動、発育問題に対してトリプルP認定専門家による短期カウンセリング、レベル4：8人～12人の親（グループ）を対象とするトリプルP認定専門家による8～10回の講習プログラムで、一般的な子育て法の指導と、子どもの問題行動への親の対処手法を教示するもの、レベル5：困難な複合的問題を抱かえた個別の家庭のためのプログラム、などが開発されている。

2. 対象

W 県の実全児童福祉施設 10 カ所（1 乳児院、8 児童養護施設、1 情緒障害児短期治療施設）に勤務する職員に対し、本研究の趣旨に賛同した施設長の推薦に基づいて、プログラム研修として希望参加者を募集した。24 年度は 16 名、25 年度は 21 名の計 37 名の参加希望があった。両年度で県下すべての施設が参加した。

3. 介入方法（プログラムの内容）

トリプルPは、レベル4のグループプログラムを行い、保護者用ワークブックを教材とした。1セッション120分とし、

午前1セッション、午後1セッションの2セッションを第1週、第2週に行った。内容はワークブック、DVDを使用し、グループで前向き子育ての考え方、子どもの行動記録のための講義をファシリテーターから受け、対応スキル習得のためのロールプレイを行う。第2週の4セッション終了後に、習った子育てスキルの実施状況の確認や改善策を話し合い、最終セッションで振り返りとまとめを行った（図1）。

なお、ファシリテーターは、トリプルP国際ナショナル公認の養成講座を受け認定試験に合格した者のみが実施可能である。本研究においてプログラムは、24年度、25年度とも同一の1名のファシリテーターが担当した。

4. 分析方法

プログラム参加者は、以下の質問票についてプログラム直前およびプログラム終了後（1週～1ヶ月以内）の2回記入した。子どもは職員が担当している被虐待児童である。解析は～の質問票について得点の平均値と標準偏差を求め、プログラムの前後比較をペアードt検定により行った。P<0.05を有意とした。

子どもの長所短所調査票（SDQ:

Strengths and Difficulties Questionnaire, 25項目）(Goodman, 1997;1999)

抑うつ不安ストレススケール(DASS: Depression Anxiety Stress Scales, 42項目）(Lovibond et al, 1995)

親の子育てスタイル（PS: Parenting Scale,30項目）(Arnold et al,1993)

親の子育てに関する自信の程(PSBC: Problem Setting and Behaviour Checklist, 28項目)(Norton, 1983)

子どもに対する不適切な行為の状況
(JM17: Japanese version of maltreatment 17
項目)(子ども虐待防止センター,1999)

子ども虐待認識調査票
(CA38: 38 項目)(高橋, 1996)

日本版子ども虐待ポテンシャル調査票
(JCAP77 77 項目)(河村, 2005)

なお、プログラム直後に以下の2つ
の質問票を追加した。

プログラムの満足度

17の育児スキルの使用頻度

プログラム終了後(直後)質問票は、
プログラム終了後1~4週の間で回答が
行われた。

5. 倫理的配慮

個人情報の取り扱いに十分な配慮を行
うこと、回答の内容は個人が特定されな
いよう匿名化、数値化して扱うこと、結
果については研究目的以外に使用するこ
とがないこと、また個人ではなく集団と
して結果を公表することを文書で説明
し、同意を得たものを調査対象とした。

D. 研究結果

1. 児童福祉施設の職員について

プログラム終了後に質問票への回答の
あった34名(91.9%)を分析対象とした。
34名中男9名(26.5%)、女25名(73.5%)
で、平均年齢は32.88歳であった。平均
勤続年数は3.44年(中央値1年)であっ
た。職種は児童指導員18名、保育士14
名、心理療法士1名、施設長1名であっ
た。なお、プログラム実践は、参加職員
毎に担当の1名としたが、重複を含め、
発達の遅れ10名、病院定期通院5名、情
緒行動の問題5名、視覚聴覚障害1名で
あった。

2. 質問票の結果

子どもの長所短所調査票(SDQ)

児の短所(困難性)は、情緒問題、行
動問題、過剰活発、交友問題の4つの下
位項目とこの4つの問題の合計である。
すべての項目で有意な変化はなかった。
(図2)

抑うつ不安ストレススケール(DASS)

すべての項目で有意な改善はなかった
(図3)。

親の子育てスタイル(PS)

手ぬるさ、過剰反応、多弁さの項目で
改善を示し、多弁さ($p<0.01$)と合計
($P<0.05$)で有意な改善を得た。

(図4)

親の子育てに関する自信の(PSBC)

プログラム前後比較で、子育ての自信
が有意に上昇した($p<0.05$)(図5)。

子どもに対する不適切な行為(JM17)

前後比較で有意改善はなかった。(図
6)

子どもの虐待認識(CM38)

前後比較で有意改善なかった。

(図7)

子ども虐待ポテンシャル

プログラム後、ポテンシャルの有意な
低下が得られた(図8)。

プログラムの満足度

プログラム直後の保護者の感想で、「プ
ログラムから期待していた援助を得た」
「全体的にみてプログラムに満足した」
などが高得点であった(表1)。

17の育児スキルの使用頻度

どの子育てスキルもよく使用されて
いたがクワイエットタイム、タイムアウ
トは、比較的使用頻度は少なかった
(表2)。

E. 考察

平成 16 年の児童虐待防止法の改正により、保護者に対する親子の再統合の促進等は、国や地方公共団体の責務として位置付けられ、平成 19 年の同法改正では、指導勧告に従わない場合の措置についての規定や、措置解除する際に保護者指導の効果等を勘案することなど、保護者への指導・支援の強化がなされた。

しかし、親子分離をした子どもを含め被虐待児の親子関係の修復は多様で複雑な課題を抱えている。保護者は虐待を否認したり、児童相談所との対立がある場合も多い。また虐待を受けた子どもは保護者との愛着形成に課題があり、社会適応の難しさがあるとの指摘がある。

このような被虐待児と保護者の親子関係再構築支援の必要性に基づき、今後の課題として、保護者支援プログラムの開発・普及、関係機関の連携による家庭復帰支援、養育者の養育スキルの向上が抽出されている。

本研究は、平成 24 年度の報告で被虐待児と保護者の親子関係の再構築を図る方法の一つとして、グループ・トリプル P が、子どもの問題行動の改善、親の心理状態、子育てスタイル、子育ての自信の改善とともに、子育て支援プログラムへの満足度においても良好な結果が得られたことを鑑み、児童福祉施設への子育て支援プログラム導入の可能性を検討したものである。

1. 児童福祉施設の参加職員について

参加職員は、プログラム前の質問票の虐待行為 (JM17)、虐待認 (CM38)、虐待ポテンシャル (JCAP77) はいずれも正常範囲で、児童相談員、保育士という

専門性を支持している結果であった。年齢は 30 台前半で若く、勤続年数の中央値が 1 年であることから、一般の母親と同様に子育て経験があまりない状況にあった。DASS の抑うつ、不安、ストレスもすべて正常の心理状態であった。なお、担当の子どもは、行動問題、困難度合計、交友問題で臨床域を示していた。

2. プログラム効果測定について

担当の子どもに関して SDQ のすべての領域で有意改善が得られなかったが、観察期間 (1 週から 1 ヶ月) と短期であったためと考える。DASS は職員の直前心理状態が正常域であったため有意な変化につながらなかったものと思われる。

改善を示した子育てスタイル (PS) や子育ての自信 (PSBC) は、プログラムを通して好ましい親子関係を学ぶ機会となったこと、そして子どもの生活上の問題行動に対し、具体的な方略を知ることにつながったと考える。

さらに、虐待に至る可能性を示す虐待ポテンシャル (JCAP77) で、ポテンシャルが有意に低下したことは、施設内での虐待予防効果においても、トリプル P は期待できると考える。

今後、今回の効果の継続性ととともに、子どもの行動の改善効果について長期の経過観察が望まれる。

F. 結語

1. 児童福祉施設職員 34 名に対してグループ・トリプル P を行った。

2. PS、PSBC の有意な改善が得られ、プログラム満足度の良好な結果を得た。

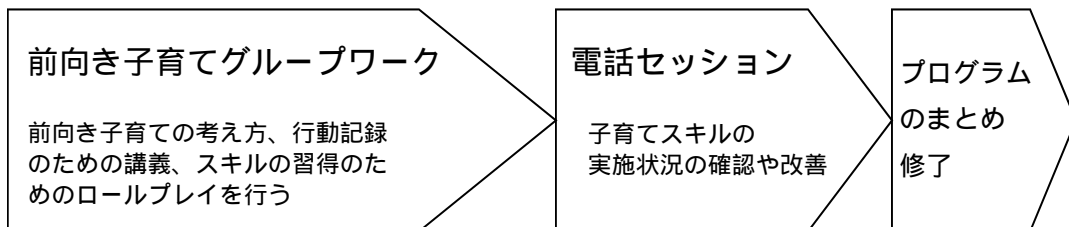
3. 虐待ポテンシャルの低下から、施設内虐待予防の可能性が示唆された。

G.参考文献

- 1.厚生労働省：児童虐待対策の現状と今後の方向性
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/about.html
2. 子どもの虹情報研修センター：児童虐待防止対策について
www.crc-japan.net/contents/situation/pdf/20130611.pdf
- 3 .厚生労働省:児童虐待を行った保護者に対する援助ガイドライン
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv21/01.html>
- 4 . 加藤則子、柳川敏彦編集(2010)「ちょっと気になる」から「軽度発達障害」まで．トリプルP

～前向き子育て17の技術～
 診断と治療社

- 5 . 柳川敏彦、平尾恭子、加藤則子ら（2009）児童虐待予防のための地域ペアレンティング・プログラムの評価に関する研究 - 「前向き子育てプログラム(トリプルP)」の有用性の検討 . 子どもの虐待とネグレクト, 11, 54-68.
- 6 . 柳川敏彦, 平尾恭子, 加藤則子ら（2012）自閉症スペクトラム障害の子ども家族のためのペアレント・プログラムの実践 - グループ・ステップングストーンズ・トリプルPの効果について - . 子どもの虐待とネグレクト, 14, 135-152



第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回
前向きな子育てとは？	子どもの発達を促す	問題行動を取り扱う	計画を立てて行う	実践(1)	実践(2)	実践(3)	プログラムの修了と振り返り

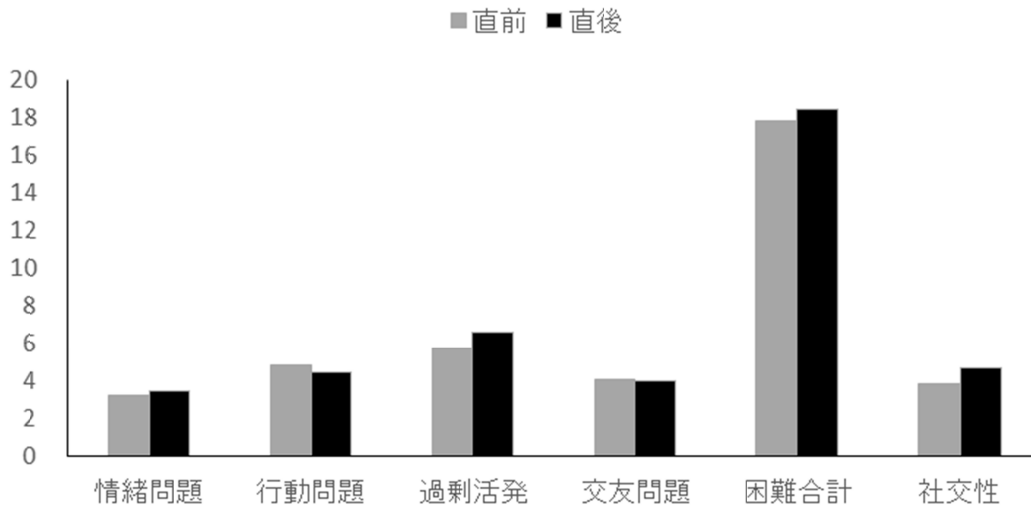
通常のプログラムはグループで実施し、週に1回ずつ計8回行う。1回の所要時間は120分。

第5回～7回の電話セッションは、ファシリテーターと個別で行い、1回20-30分

本研究では、第1週に第1回・第2回内容分、第2週に第3回・第4回内容分を施行した。

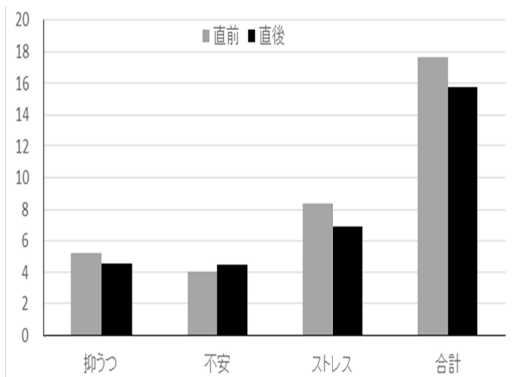
第2週以降で、電話セッションは直接面談に変更し、第3週で第8回の振り返りを行った。第2週から第3週の間で面談が行えなかった参加者には8回終了後面談で実践を確認した。

図1. グループ・トリプルPの実施例



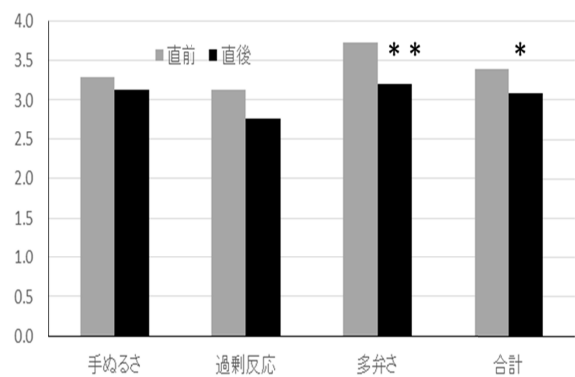
注1) 児の短所(困難性)は、情緒問題、行動問題、過剰活発、交友問題の4つの下位項目で示され、この4つの問題の合計を困難合計とした。これらは値の減少が改善を意味する。子どもの長所は社交性で示され、社交性の値の上昇が改善を意味する。

図2. 子どもの長所短所調査票 (SDQ: Strengths and Difficulties Questionnaire)



3つの下位項目は値の低下が改善を示す。

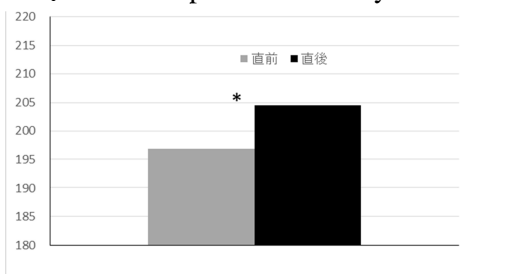
図3. 抑うつ不安ストレススケール (DASS: Depression Anxiety Stress Scale)



** P<0.01 *P<0.05

3つの下位項目は値の低下が改善を示す。

図4. 子育てスタイル (PS: Parenting Scale)



値の上昇が改善を示す。*p<0.05

図5. 子育てに関する自信の程度 (PSBC: Problem Setting and Behaviour Checklist)

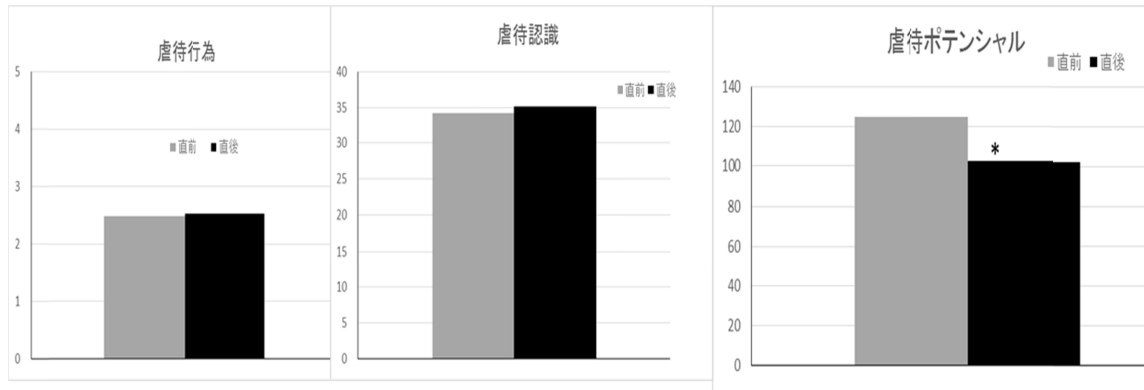


図 6 (左) 虐待行為 JM17
親 (本研究で施設職員) の児童に対する 17 の行為。8 点以上が虐待傾向。

図 7 (中) 虐待認識 CA38
38 の行為についての認識。

図 8 (右) 虐待ポテンシャル JCAP77
77 項目についての行為を行う可能性。159 点以上虐待傾向。

表 1. プログラムの満足度

得点は 7 点満点中の値

質問内容	得点
今回、あなたとあなたの子どもが受けたサービスの質はどのようでしたか？	6.1
あなたはプログラムから期待していた援助を得ましたか？	6.5
あなたの子どもに必要なことにこのプログラムはどの程度合っていましたか？	5.3
あなたに必要なことにこのプログラムはどの程度合っていましたか？	5.3
あなたとあなたの子どもがこのプログラムから受けた援助にどのくらい満足しましたか？	5.6
あなたの子どもの行動をより効果的に扱うのにこのプログラムは役立ちましたか？	5.9
あなたのご家族に生じた問題をより効果的に扱うのにこのプログラムは役立ちましたか？	5.5
プログラムにより、あなたとあなたのパートナーとの関係は改善されたと思いますか？	4.5
全体的にみて、あなたは今回受けたプログラムにどの程度満足していますか？	6.3
もしもう一度援助が必要になったとき、またトリプル P を受けますか？	5.9
あなたの家族の他のメンバーに対し、プログラムのスキルを応用することができましたか？	4.9
あなたの判断で、今あなたの子どもの行動についてどのように思いますか？	5.0
あなたの子どもの進歩・成長(変化)について、現時点であなたはどのように感じていますか？	4.9

表 2. 17 の育児スキルの使用頻度

得点は 7 点満点中の値

17 のスキル	得点
子どもと良質な時を共有する	6.2
子どもと話す	6.2
愛情を表現する	6.1
子どもを(描写的に)ほめる	6.4
子どもに注目している気持ちを伝える	6.2
一生懸命になれる活動を与える	6.1
よい手本を示す	6.1
適時を利用して教える	6.2
アスク、セイ、ドウ	6.2
行動チェック	6.1
基本ルール	6.0
会話による指導	6.1
計画的な無視	5.9
はっきりした穏やかな指示	6.1
理にかなった結果	5.9
クワイエットタイム	5.4
タイムアウト	5.5